

機械仕掛けの夢

かぶらやこうし
鏑谷 矢

「やめろ……未希^{みき}、やめるんだ」

夢遊病者のように男が近づいてくる。

青ざめた顔で、無表情に、しかし何かに取り憑^つかれたような執拗^{しつよう}さで。

ひゅっと吸い込んだ息の音で目が覚めた。

反射的にベッドに身を起こす。

またあの夢だった。

この数日、眠る度に同じ夢を見る。

気がつくとき窓から朝日が差し込んでいた。

山本未希は、見慣れた部屋の景色に、ほっとため息をついた。

荒い息を整えながら、しばらくじっとしていると体が冷えて来る。

ひどい寝汗だった。

「このままじゃ……なんとかしなくちゃ」

決意を込めて未希は自分自身に宣言した。

ドアチャイムが鳴った。

ソファで横になっていた未希は、飛び起きて小走りに玄関に向かった。

鍵を開けようとして思い直し、覗き穴を通して相手を確認する。

レンズの向こうには、青白い生真面目な顔をした男が立っていた。

「どなた？」

見当はついたが、用心のためにドア越し尋ねる。

誰かが、あいつに頼まれてドアを開けさせようとしているのかもしれないからだ。

「私は槇名晃司^{まきなこうじ}、里中由衣^{さとなかゆい}から頼まれて来た者だ」

「証明して」

「聞いていないのか？」

「誰かが来るとは聞いていたけど、あんたがあいつとグルじゃないっていう

証拠がないもの」

「分かった。もうすぐ彼女が来るだろう。それまでここで待とう」

「ちょっと待って」

未希は、隣に住んでいる詮索好きな主婦の顔を思い浮かべ、とっさに言った。

あの女のおしゃべりのせいで、三日前に、あいつが部屋の前で起こした騒ぎは、おそらくこのマンションに住む住人のほとんどが知っているに違いない。

他人にどう思われても構わないが、わざと自分が出て行く時に合わせてドアを開け、

「この間は大変だったわねえ」

などと、お為ごかしにあの女に同情されるのはたまらない。

ただでさえ、未希のことを「男出入りが激しい尻軽女で、振った男がストーカーになって、襲われている」という噂を流している女なのだ。

今日、また別な男が、ドアの前でうろつこうものなら、どんな噂が作り上げられるか分かったものではない。

現に、今も、扉の前で聞き耳を立てているかもしれないのだ。

仕方なく、未希はドアを開けた。

「どうぞ、入って」

入って来たのは、ひどく背が高い男だった。

三十過ぎだろうと未希は見当をつける。

男が彼女の前を通り過ぎる時、ほんの少し異臭がした。

「そのへんに座って」

4LDKのリビングに男を通すと、未希は床を指さし、自分はどすんとソファに腰を下ろした。

足を組む。

男の目の高さが、座ったミニスカートと同じになるのを計算してのことだ。無愛想な男に対する挑戦のつもりだったが、男は無反応だった。

未希は、ふう、とため息をつく。と煙草に火をつけようとした。

「煙草は吸わないでくれ」

部屋に入って初めて、男が口を開いた。

「なんでよ」

「妻に止められているんだ」

「へえ、あんた結婚してるんだ」

そういって、未希は手にした煙草を折ってゴミ箱に捨て、ことさら大きく足を組み替えた。

「あんたではなく槇名と呼んでくれ」

「由衣センセから、だいたいの話は聞いているんですよ。マ・キ・ナさん」

「一応は」

槇名は鞆から小さなガラス瓶を取り出した。

何だろうと見ていると、キャップを回して中身を飲む。

その時になって、未希は、槇名の手が小刻みに震えているのに気づいた。

飲み終わって吐く息から、瓶の中身がウイスキーであることが分かる。

彼女の頭にひらめくものがあった。

玄関で槇名が発していた異臭は、息に混じる酒の匂いだったのだ。

槇名はウイスキーの瓶を鞆にしまうと、かわりに小さなA5サイズのバイブル手帳を取り出した。

「ねえ、あんた、ひよつとして……」

「聞きたまえ、君のことだ」

未希の言葉を遮って、槇名は手帳を読み始めた。

「山本未希、十九歳。父は新潟の中堅建築会社ヤマシンの社長。昨春から本郷にあるデザイン学校に通うために親が用意した高級マンションで生活を

始めた。

両親が早くに離婚したことによる極端な父性依存への反発として、過度に父親に反発する性格偏向が認められるが、境界性人格障害、いわゆるボーダーにまでは進んでいない。

父親の期待する『良い子』への反発から高校時代から異性交遊は盛んであったが、上京を期に過去の交際は清算、昨夏に大学生、鳴海孝史と知り合い交際を始める。

今年に入って自動車の免許を取ったため、父親にねだってプジョーを買ってもらおうと外車の輸入代理店を回るうちに、ディーラー社長の高橋精二と知り合い、付き合い始めたため、鳴海と別れようとするが話がこじれ、ストーカーと化した鳴海につきまとわれるようになる」

そこまでひと息に読み上げると、手帳を閉じた槇名は続けた。

「つまり、幼児期によくあるトラウマを理由に、自らの性格をねじ曲げて甘ったれた生活を送るうち、大変な落とし穴に落ち込んだ愚か者ということだ。だいたい、こういう性格は死ぬまで治らない」

「ちょよ、ちょっと待ってよ」

未希は、慌てて言った。

「その、人の感情を完全無視した人生の要約は何よ」

「由衣から聞かされた君の生い立ちと、それから判断した性格診断だ」

「診断って……だいたい、その最後の決めつけは何よ。ムカツク！」

「だが正しい。腹が立つのはそれが事実だからだ。真実は人を怒らせる」

「あつたまにくるなあ。あんただって昼間から酒を飲んでるアル中じやない」

「い」

「事実だが、別に腹は立たないな」

「出てって。もう出てってよ！」

未希の叫びと、チャイムがシンクロした。

睨みつけながら玄関に向かう未希をまったく無視して、槇名は手帳を再び開いて何かを書き付けている。

「そう言わないで、ね、未希ちゃん。こう見えて頼りになる人なのよ。私が保証するわ」

里中由衣は、懸命に未希をなだめた。

「そうは見えないもん」

「本当よ、おまけにこの人、強いんだから」

「うそ？」

未希は、あらためて槇名を見た。

背は高いが、全体にひよろつとした印象で強くは見えない。

おまけにアル中だ。

「槇名さんは、合気道の師範なの。お父様は昭和の逸材と言われた方で、今も自衛隊や警察で特別指導なさっているわ」

「でも、この人、アル中でしょ」

「少し飲んでるだけよ。依存症じゃない。それも私が保証する」

なおも黙っている未希に、由衣がだめ押しをするように言った。

「いい、未希ちゃん。このままだと、いつまた、この間みたいに怖いことが起こるかもしれないでしょう。だから、しばらくの間だけでも、出かける時は槇名さんにボディガードしてもらった方がいいのよ。あなただって、ずっと学校を休んで家に籠もりっぱなしでいるわけにはいかないし」

半年前から世話になっているカウンセラー、里中由衣の、毅然として落ち着いた声を聞いていると、未希は、同姓でありながら、うっとりとした気持ちになってしまうのだ。

なんてカッコ良い女性なんだろう。綺麗だし頭も良い。

自分なんかは、逆立ちしたってかなわない。

「いいわね。未希ちゃん。この間みたいに怖いことはもう嫌でしょう」

由衣の言葉で未希は我に返った。

三日前、駅へ向かう途中の公園で鳴海孝史なるみたくしに掴みかかられたことを思い出し身震いする。

「でも、孝史は、ずっとラグビーをやつて運動神経抜群なのよ。この人で大丈夫なの？」

未希は、痩せた槇名を小馬鹿にした目で見る。

「もちろんよ。鳴海孝史が現れたら、もうあなたに近づかないように、槇名さんが強く言ってくれるわ」

「その前に、直接その男と話がした方が良いんじゃないか」

由衣が来てから初めて槇名が口を開いた。

「その方が早いはずだ」

「それが出来ないのよ」

申し訳なさそうに由衣が答える。

「なぜ？」

「彼は、家賃滞納で今月の始めから住んでいたアパートを追い出されて、今はネット・カフェを転々としながら暮らしているの」

「そ、いわゆるネット・カフェ難民。ダサイわね」

未希が吐き捨てるように言い、

「携帯電話は使用不能だから、連絡もとれないの。だから彼が現れるのを待つしかないのよ」

由衣が付け加えた。

未希は、由衣と槇名の顔を交互に見ていたが、やがて肩をすくめた。

「アル中のボディガードでもないよりいた方がまし、か……でも、お金は払わないわよ」

「そんな心配しなくても良いわよ」

由衣が首を振った。

「でも不思議だなあ。なぜ、そんな面倒な仕事を引き受けてくれるの、この人」

「あなたの身が危険だからよ」

「先生が頼んでくれたからでしょう」

「だといんだけど」

そういつて由衣は優しく笑った。

それを見て、未希はあらためて、センセにはかなわないな、と思う。

二十八歳の由衣は、未希より九歳年上だったが、実際の年の差以上に、年上の大人の女性を感じさせる。

とりあえず、明日から三日間、由衣が外出する時に、榎名がボディガードをするということで話は決まり、榎名と由衣は帰って行った。

翌日、午前九時半に榎名が迎えに来た時、未希はまだ寝ていた。

電話のコールで時間を知った未希は、慌てて支度して部屋したくを出る。

マンションのエントランスで榎名は待っていた。

時計を見ると十時五分钟前だ。

今日の授業は十時半からなので、十分に間に合うだろう。

榎名を待たせたことは、気にならなかった。

未希は、昔から男は女を待つものだと思っているからだ。

マンションを出て、いつも通り歩いて駅に向かう。

榎名は、少し離れてついて来る。

どうせなら、榎名が自動車で迎えに来てくれれば良いのに、と思うが、孝史を誘い出して、注意することも目的のひとつだから仕方がない。

その日、孝史は現れなかった。

翌日も現れなかった。

ほっとすると共に、時が経つにつれ、美希の中に、よくわからない不満が溜まっていた。

おそらく。槇名の視線のせいだった。

ボディガードする間、未希が信号無視をしても、優先席に座って年寄りに席を譲らなくても、槇名は一切注意をしない。

ただ黙って見ているだけだ。

だが、その視線が、なぜか未希には痛かった。

言葉では何も言わないが、冷ややかな目の中に、無言の批判を感じるからだろうか。

三日目の朝、未希がエントランスに出て来ると珍しく槇名が口を開いた。

「ひとつ聞きたい」

「なに？」

「毎朝、何を食べている？」

「何も」

「朝食抜きか。どうりで、いつもそんな顔をしているわけだ。鏡を見ているかどうか知らないが、酷い顔だ」

「大きなお世話よ」

未希の中で怒りが急速に広がった。

「うるさいわよ。いちいち余計なことを言わないで、あんたは、ただ孝史が出てくるのを待って脅してくれたらいいのよ」

未希は叫んだ。

「だいたい、あなたに偉そうにいう権利があるの？つきあってくれてるのに、こんなことは言いたくないけどさ。いい大人が昼間からぶらぶらして。仕事

は無いの」

「仕事はある。休暇中なんだ」

「そっか、合気道のお師匠様とはいえ。人気があるのは父親の方だもんね。いいご身分なこと、あっ」

突然、目の前に、大きな影が現れて希は叫んだ。

視線を上げると、うっそりと鳴海孝史が立っている。

マンションの前で未希の出てくるのを待っていたらしい。

未希の脳裏に、数日前の恐怖が蘇った。

「なあ、未希い」

孝史が唸るように言った。

「やめろよお」

「いや！来ないで」

「未希い」

鳴海孝史が、手を伸ばして未希をつかもうとしたその時、素早い影が二人の間に割り込んだ。

槇名だった。

「駄目よ、逃げて」

未希は叫んだ。

背は槇名の方が少し高いが、体重は三十キロ近くは違うだろう。

枯れ枝のような槇名が、がっしりとした孝史にかなうわけがないと思ったのだ。

だが、未希の考えに反して、槇名は孝史の太い腕を掴むと、鮮やかに逆手を取って地面に押さえつけた。

それだけで、孝史の大きな体は身動きが取れなくなってしまったようだ。

「もう彼女につきまとうのは止めてくれ」

槇名は、未希が初めて耳にする優しい声で言った。

鳴海孝史は低く唸った。

「わかったか」

重ねて榎名が言う。少しだけ腕をひねり上げた。

「わ、わかった」

榎名が手を離すと、孝史はふらふらと立ち上がり、よろめきながら去っていった。

榎名は、孝史が倒れていた後に、小さなカードケースが落ちているのを見つけた。

拾って中身を改める。

レンタルビデオやレストランの会員カードが何枚か入っていた。クレジットカードや現金は入っていない。

ケースをポケットにしまう榎名の背中に未希が声をかけた。

「何よ。あんな優しい言い方で、あいつが言うこときくと思ってるの？ 私には、きつい言い方るくせに。逆じゃないの？」

「相手を選んで話しているだけだ」

「あつたまくるなー」

「ともかく、あと二日だけは君を警護する。それで鳴海孝史が君の前に現れなければ、わたしの言うことをきいたと考えて、ガードはやめる」

「あんたの警護なんて、こっちから願下げよ」

その夜、深夜零時を過ぎてから、未希はタクシーを拾って六本木に出た。いくつか店を回るうちに探していた男を見つける。

「よお」

マルタと呼ばれているその男が手を上げた。

左臉と唇のピアスが光る。

「しばらく見なかったな。どうしてた」

「まあ、色々だね。そんなことよりアレある？」

マルタは笑顔を消し、一瞬、鋭い視線を左右に配ると短く頷いた。

「ついて来な」

二人そろって店を出る。

少し歩いて、ビルとビルとの路地に入ると、マルタはショルダーバッグから銀の包みを取り出した。

中身を見せる。

「それでいい。いくら」

マルタが金額を言った。

「前より高いじゃないの」

「変動相場だぜ。前にお前が買ったのはいつだ？もう二ヶ月以上前だろう」

「分かった。払うわよ」

未希は支払った。

差し出された銀の包みを手にした時、突然、背後から声が出た。

「その子に妙なものを売らないでくれないか」

驚いて振り返ると、榎名が立っていた。

「何だお前は」

マルタは滑らかな動作でポケットからナイフを取り出した。

素早く刃を広げると、いきなり榎名に突き出す。

榎名は軽く後ろにスウェイして刃先をかわし、ナイフを持つマルタの利き腕を上下からつかんだ。

ほんの少し力を加えたように見えた次の瞬間、マルタの体はきれいに回転し、ビルの壁に顔からぶつかった。

一言も発せず、そのまま崩れ落ちる。

無表情なまま、榎名はマルタのバッグから先ほど未希が渡した金を取り出した。

未希の手から銀の包みを取りあげ、ちよつと中身を見てからマルタのバッグに突っ込む。

「帰ろう」

そう言つて手をつかまれ、路地から引き出される。

槇名の息には、強い酒の匂いが混じっていた。

「着いた。さあ、降りるんだ」

槇名は、そう言つて未希の腕をとつてタクシーから降ろした。

マンションを見上げる。

「タクシーを使えば新宿からも六本木からも十五分の高級マンション。贅沢なものだ。それほど君の父親は、君を大切にしてくれている。まさか、あんなものに手を出しているとは夢にも思わずに」

未希は、つかまれた腕を振り払うと、黙つたままエントランスに向かった。

槇名は着いてくる。

そのままエレベーターに乗り、小走りにドアまで向かうと、鍵を開けて部屋に入った。

普段は部屋の中には入つてこない槇名が、するりと滑り込んで来る。

「大麻だな」

槇名が言った。いつに増して声が冷たい。

「そうよ」

「いつから」

「わたしの勝手にしょ」

未希が頬を膨らませた。

「いつから吸っているんだ」

槇名は未希の肩をつかんだ。多い被さるようにして問いつめる。

「言う、言うわよ……去年のクリスマスから。友達からすすめられて一緒に

吸ったのよ」

「何度吸った」

「どうだっていいじゃん」

「何回吸ったんだ？」

「さあ、五、六回かな」

「本当か？」

「十回、二十回かも。どうだっていいじゃない。そんなこと」

「朝に食欲が無い理由はそれか」

「放つといてよ」

「放つてはおけない。二度と吸うな」

「なんでよ。なんでアル中のあんたにそんなことを言われなきゃならないの。

大麻なんて麻薬じゃないし」

「麻薬だ」

「中毒にもなっていないし、悪いことなんか何もない」

『『まだ』何もないだけだ。続けると大麻精神病になって幻覚や幻聴を見るようになる』

「大麻に副作用なんてないわよ」

「誰が言った？そんなことを誰が言ったんだ」

言いながら、槇名は未希の腕をとるって壁に押しつけた。

「ちよ、ちよっと、そんな大声を出さないでよ。痛いじゃない。誰って、みんなそう言ってるわよ」

「馬鹿な」

「いったいどうしたのよ。あんた、あたしが何しても黙って見てたじゃないの。なんで大麻だけうるさく言うの」

槇名はその質問には答えなかった。

「もう一度言う。もう大麻はやめろ」

「……」

「返事は」

「分かったわよ」

ふてくされた表情で未希は答えた。

槇名が手を離すと腕をさすりながら呟く。

「あーあ。どうして日本では大麻を売ってないのかしら？外国では普通に買えるところもあるっていうじゃない」

「やがては人を死に至らしめる毒だからだ。特に精神を蝕む」

「酒は違うの？あんたが多分ずっと飲んでるやつ」

「……」

「説得力ないなあ。もう」

未希は大げさにため息をつき、話題を変えた。

「ねえねえ。やつぱりさ、日本で、クスリをマルタみたいなヤツから買わずに使おうと思ったら、医者か看護師にならなきゃ駄目かな」

「なに？」

「医者っているいろいろな薬使うらしいじゃん。モルヒネとかさ。前にマルタが言ってたけど、医者で中毒って結構多いんでしょ」

「中には激務に疲れて使う者もいる。だが、特にモルヒネは毒性が強いから快樂目的に使うのは間違っているんだ」

「そういえば、この間、医者のおさんが、薬を打ちすぎて死んじゃったって事件があったわね。あれってモルヒネでしょ」

槇名はそれ以上未希と話をする気はなさそうだった。

「とにかく、君は、もう、あのマルタという男からは大麻は買えない。今度会えば彼に仕返しをされるだろう」

「わかってるわよ。あたしだって馬鹿じゃないもの。でも、あんた、なんでクスリに詳しいの」

「大麻で身を滅ぼした者がいる」

「なんだ。あんたの教え子もやってるんじゃないの」

「とにかく、二度と麻薬には手をだすんじゃない」

未希の言葉を無視して、槇名はそう断言した。

翌日の昼過ぎ、未希を学校に送っていった槇名は、国道沿いにあるネット・カフェを訪れた。

拾った会員証から、鳴海がこの店の会員であることを知ったのだ。

受付で利用方法を教わる。

基本的に会員制ではあるが、パーティションで仕切られた個室ではなく、入り口付近のオープン・スペースを喫茶店代わりに使うだけなら、会員にならなくても利用できるらしい。

一時間三百円の利用料金を払って領収書を受け取る。

会員になれば、シャワールームや、ダーツ、ビリヤード用のプール・ルームも利用できるようだ。

深夜割引を併用すると、一泊二千円足らずで泊まることができる。

鳴海のようにアパートを家賃滞納で追い出された若者が、いわゆるネット難民として寝起きするようになるはずだ。

受付に置かれた使用シート・ディスプレイによると、平日の昼間にもかかわらず七割の個室ブースが使用中になっていた。

鳴海孝史と待ち合せていると告げると、店員は、すぐにどのブースに鳴海がいるかを教えてくれた。

こういった脇の甘さは。人を探す時には助かる。

ホテルだったら、守秘義務が徹底されているため、どんな場末のものでも、こうは行かない。

教えられた番号の個室の扉を開けると、鳴海が背を向けて座っていた。

体に毛布を巻き付け、放心した表情で、何も写っていないパソコンのディスプレイを見ている。

肩を叩くと、ゆっくりと鳴海は振り返った。

その顔に、冷や汗が一杯に浮いているのを槇名は見た。

槇名は鳴海を個室の外に連れだした。

鳴海は抵抗しなかった。

ブース横の、全面ガラスで隔てられたビリヤード・ルームに人影がないことに気づき、鳴海の背中を押して中に入る。

この部屋は、球の弾ける音が外に漏れないように防音処理がされているようだ。

扉を閉めると槇名は鳴海と向き合った。

鳴海は黙って立っていた。

頭が緩やかに前後左右に揺れている。

目の焦点はうつろだった。

ただ、歯だけをがちがちと鳴らせ続けている。

「山本未希のことで尋ねたいことがある」

槇名がそういった時、

「未希、みき——うわあ、虫が」

鳴海は、突然叫んで、体中をかきむしり始めた。

「どうした、しっかりしろ」

槇名の声がまるで聞こえないように、鳴海は体を血だらけにしてかきむしり続ける。

槇名はドアを開け、店員を呼び一一九番通報をさせた。

暴れる鳴海に毛布をかぶせ、店員に押さえつけさせる。

やがて救急車の音が近づくと、気づかれぬように槇名は店を出た。

「あの様子はおそらく……知らなければ何もしなかっただろう。だが、知っ

てしまったからは仕方がない」

足早にネットカフェから立ち去りながら、槇名は呟いた。

授業を終え、友人と校門を出てきた未希の前に、細長い影が立った。

槇名だった。様子がおかしい。

「なによ」

未希が小さく叫び、取り巻いていた数人の女友達が思わず後ずさった。

それほど槇名の顔色は青ざめていた。

「話がある。来てくれ」

返事を待たずに槇名は先に立って歩き始め、一軒の喫茶店に入った。

大きな店内に、人影はまばらだった。

店の奥まった場所、周りに人がいない席に槇名は座る。

「なによ。みんなびっくりしてたじゃない」

槇名の向かいに座った未希は食ってかかった。

「昼過ぎに鳴海孝史に会ってきた」

「へえ、どこにいるか分かったんだ」

「彼は、君が麻薬をやっていることを知っていたな」

いきなり槇名が尋ねる。

「え、ええ。まあ、ね」

「鳴海君は麻薬中毒者だ。それもかなり進んだヘロイン中毒の」

「えっ」

「昨日、彼の顔色を見た時に、そうではないかと思った。だから、今日、彼を訪ねてみたんだ。話すうちに、彼は発作を起こして倒れた。今は病院にいる」

「そんな……」

「なぜ、彼がヘロイン中毒になった？君のせいかな」

「まさか、わたしは大麻しか知らない。ヘロインって、そんな怖いものに手を出すはずがない」

それには答えず、槇名は携帯電話を取り出した。

着信を示す賑やかなライトが明滅する電話を耳に当て、しばらく向こうの話を聞いていたが、相手に、待ってくれと呟いてから、

「ちょっと話をしてくる。ここにいてくれ」

店の隅に消えていく。

五分ほどで槇名は戻ってきた。

「鳴海孝史は、なんとか命を取り留めるそうだ」

「命……孝史はそんなに悪かったの」

「麻薬は猛毒だといったろう。病院の調べでは、彼は一週間ほど前まで大量のヘロインを接種していたらしい」

「一週間前？」

「つまり、君が彼に襲われた夜以前だ」

「何よそれ、どういうこと？」

「気になっていることがある」

槇名は未希を無視している。

「なに？」

「あの売人、マルタという男は、君が、彼から大麻を買ったのは二ヶ月前だと言っていた」

「そうよ」

「つまり、君は、クリスマスに初めて大麻を吸って、それまでに何度かあいつから買っていたということだ。その後はどうしていた？一度ドラッグに手を出した者が、何ヶ月も間を開けるなどとは信じられない。金が無ければともかく、いや金が無くても何とかして手に入れるのがドラッグだ。まして君には金がある」

「何が言いたいのよ」

「最近、誰から大麻を手に入れていた」

「誰だっていいじゃない。何よ、あんた警察じゃないでしょう。それとも、わたしのことを警察に告げ口するの」

槇名は答えない。

「そんなことはしないわよね。だって」

「大事な事だ。教えてくれ。素人が、そう何人もの売人を利用しているとは思えない。例のマルタという男、あるいは個人的な友人、それ以外にいたとしてもあと数人だろう。君のように、金に不自由せず、発覚の危険を恐れる者なら、特定の一人から手に入れていたはずだ」

「忘れた」

「思い出せ。多分、そいつが鳴海君をヘロイン中毒にした奴のはずだ」

「どうしてよ」

「君が大麻を吸っていることを鳴海が知ったのはいつだ」

「知らないわよ」

「それが、鳴海君を麻薬中毒にした犯人を見つけるヒントになるとしても、黙っているのか」

「……一ヶ月ほど前だったかな」

「その時、鳴海はどう反応した？」

「優等生ぶって怒ったわよ。あいつのそういうところも嫌いな。スポーツ馬鹿だし。その時に別れようって言ったのよ」

「誰から大麻を手に入れているかを教えたか？」

「言うわけないじゃない」

「なぜ『わけないじゃない』なんだ？優等生の彼に大麻の出所でんとしを知られて、警察に通報されたら困るということか？しかし、彼は君を愛している。たとえフラれたとしても。君が捕まるようなことをするとは思えないし、現に今

までしていなかった。他に教えない理由があったのか？」

「理由なんてないわよ」

「いや、ある。君に大麻を渡していたのが、鳴海の次に君が付き合っていた高橋精二だったとしたら君は教えない。高橋は、外車のディーラーらしいが、以前に、警察関係者から、その種の職業は海外にも顔がきき、麻薬に汚染されやすいと聞いたことがある」

未希は返事をしなかった。

だが、その表情は、ありありとそれが事実であることを伝えていた。

「昨夜、君はマルタという男から大麻を手に入れようとした。それはつまり高橋と最近会っていないということだ。高橋が海外に車の買い付けに出かけているとしても、君と付き合っているなら大麻を渡しておくだろう。考えられるのは、君は彼と……」

「そうよ。別れたの」

槇名が冷静な声で、自分の過去を語るのに堪えきれず、未希は叫ぶようにいった。

「なぜ別れた」

「なぜって、それは、あいつが、いい加減な女たらしだからよ」

「いつ別れた？」

「半月ほど前。それからは会ってないわ」

「おそらく、それ以前に鳴海君は君の後をつけ、新しい恋人が高橋であること、君が彼からドラッグを得ていることを知ったのだろう」

「はずれ。あたしの方から、新しく好きな人が出来た。高橋っていう外車のディーラーで、すごくカッコイイ人だって、別れる時に言ってやったんだ。クスリのこととは言っていないよ」

「いずれにせよ、君は、高橋から麻薬を得ていた」

「大麻だけよ。高橋は『俺は惚れた女にクスリは使わない主義だ』と言って、

大麻しかくれなかったもの。『クスリでぼろぼろになった女には魅力がない』
って言うってね。外車以外に麻薬も扱っているって言うから、それも期待して
付き合い始めたけどがっかり。せめて、デザイナー・ドラッグくらい渡して
くれるかと思ったのに。大麻だけは、煙草がわりだから良いだろうって渡し
てくれたけど」

「正確には『脱法ドラッグ』だ。『デザイナー・ドラッグ』は、『脱法ドラッ
グ』に相当する言葉がない海外で使われることが多い。本来、規制薬物は化
学構造式で定義されているから、規制逃れのため、分子構造の一部を組み替
えただけの類似薬物が作り出される。それら類似薬物は、「実験室で作られ
た薬」という意味で、『デザイナー・ドラッグ』と呼ばれるんだ。しかし、高
橋がそういう考えだったのは君にとって幸いだった」

槇名は呟き、

「いずれにせよ、鳴海君は、君が新しい男からドラッグを得ていることを知
った。そんな時、正義感のある男ならどうするだろう」

「さあ、警察に届けるかな」

「彼が、まだ君のことを好きでもか」

「相手の男に会って話をするかもね。本当に孝史がそんなことをしたの？」

「結果からみるとそうだろう。高橋は、鳴海君に、よく売人が人を骨抜きに
する手口を使ったに違いない。しばらく監禁して連続してヘロインを与え、
中毒にするんだ。そうすれば、ヘロイン欲しさに、二度と裏切らなくなる」
「でしょうね」

「いや」

槇名は、冷ややかな目で未希をみた。

「鳴海君が、警察に駆け込まなかったのは、たぶん違う理由だ」

「なに？まさか、あたしのため？」

「たぶん、そうだろう。彼は、自分の体がぼろぼろになりながら君を護ろう

としたんだ。警察からも麻薬からも」

「なんで、そんなことが分かるの？」

「一週間前、彼が君の前に現れたのは、時期から考えて高橋から解放されてすぐのことだったろう。確かその時、彼は君に『やめろ』と言ったと聞いた。

まだクスリで朦朧としている頭で、君にドラッグを止めろと言ったんだ」

「そんな」

「鳴海君が回復すれば、その辺は詳しく聞くことができるだろう。今は推理するしかない」

「まさか孝史が……」

「とにかく、何が原因であれ、君が高橋と別れたのは幸運だった」

「あんな奴。最低なもの。あたし以外に何人も女がいたんだよ」

「麻薬の売人に何を期待している」

慎名が、ため息混じりにいう。

「そりゃそうだけど……だいたい、あいつの女の口説き方っていうのが、もう最低なの。何て言うかわかる？」

「分からない。興味もない」

「聞いてよ。面白いんだから。生命保険を使うんだから」

「生命保険？」

『俺は今までいろんな女とつきあったが、心底惚れたのはお前だけだ。その証拠がこれだ』そういって、受け取り人をあたし名義にした保険の証書を見せるの。しかもすつごく高額な生命保険」

「……」

『俺はこんな仕事だし、いつ死ぬか分からない。せめて俺が死んだ時に、思い出代わりに金を受け取ってくれ』って、馬鹿みたいね。でも、そんな言葉で騙される女って結構多いのよ」

「君もそのうちのひとりだろう」

「わたしは違うわよ。ちよつとあの人が危険で面白そうに見えただけ。だいたい、お金には興味ないもの」

「結構なことだ」

「でも、アイツには、他に何人もそんな女がいた。それに気づいたから嫌になつたの」

「……その保険は、今も君が受け取り人なのか」

槇名が尋ねる。

「さあ、多分違うでしょうね。別れるなら解約するって言つてたし、掛け金も高額で。毎月の支払いもバカにならないらしいから。でも、一年以上付き合ひ続けたら、お金を受け取る権利ができるわけね。そう考えたら我慢してつきあう女がいてもおかしくない。実際、いつ死ぬか分からない仕事なんだし、アイツ」

「変わった愛情の示し方だ」

槇名の言葉に未希は口を尖らせた。

「愛情じゃない。単に女をつなぐための鎖よ。だって、あいつが怪我をしたつて一銭も入つて来ないのよ。最近の生命保険つて、自分用にいろいろオリジナルを作れるでしょう？だから、アイツは、怪我なんかの細かい保障を全部なくして生命保険だけ契約してるの。その方が掛け金が安いというのもあるだろうけど、それだけじゃない。『俺が大けがをして病院に寝ているのに、そのおかげで金を掴んで旅行に行く女がいるなんて耐えられない』なんて言うんだから」

「やはり変わっている」

『俺は、それで大きくなつたからな』つて、アイツそう言つてた」

「大きくなる？」

「彼の母親つてというのが、金持ちの愛人だったんだつて。結婚も認知もしてもらえなかつたけど、保険の受取人になつていたから、アイツの父親が交通

事故で死んだ時に、母親が大金を受け取ることができた。それで生活して、大学にも行って、海外留学もしたんだって」

榎名は、しばらく黙りこんだ。

「留学か。外車ディーラーになる素地はあったということだな」

「アイツ、本当はヤクザなの。三縄組系みなわのね。ただ、ちょっと特殊だけど」

「特殊とは？」

「ドイツに留学していた経験から、向こうの組織とつながりがあるんだって」

「ドイツ。だからヤクザの隠れ蓑が外車ディーラーなのか」

「榎名さん。あなたは刑事じゃないの？」

「違う。でも、なぜ？」

「だって、いろんなことにやたら詳しいし、考え方がまるで刑事みたい」

「刑事と接する機会が多いからだろう」

「そっか、榎名さん、合気道を、警察で教えてるんだ」

「父が教えている。わたしは手伝いをしているだけだ。ひとつ質問がある」

「なによ」

「いま、高橋精二はどこにいる」

「知らないわよ。別れたんだから。たぶんお店でしょ」

「では、店を教えてください。高橋に聞きたいことがある」

未希は、品川にある高橋の店の住所を言った。

その時、再び榎名は携帯電話を取り出した。

着信中のライトが光っている。

「ちょっと待っていてくれ」

榎名はそう言い残して店の端に移動する。

三分ほどで榎名は帰って来た。

未希は、携帯電話を閉じながら、思い詰めた表情でいう。

「やっぱり行くのはやめようよ。警察に任せた方がいいよ」

「こういったケースの場合、どうしても警察はフットワークが鈍くなる。だから警察が動きやすいように、あらかじめ燻^{いぶ}りだした方が良いんだ。すでに鳴海君が麻薬漬けにされている。早くしないと次の犠牲が出るだろう」

「でも、あたしは知ってるけど、あの店は一見小ぎれいな外車専門店みたいだけど、中にいるのは三縄のヤクザばかりよ。危ないわ」

「いつもは何人ぐらいいるんだ。君も行った時に見ているだろう」

「五、六人かな」

「それぐらいならなんとかなるさ」

無表情なまま言い切った槇名の目に怪しげな光が宿り、未希は背中に冷たいものを感じる。

「槇名さん。あなたちよつと変よ、まるで死にたがってるみたい。相手は刃物や拳銃だって持っているかも知れないのに」

その時、喫茶店に中年女性の団体が入ってきた。

手にしたパンフレットから、若手演歌歌手の舞台帰りの集団らしい事が分かる。女性達は、わらわらと別れて椅子に座り始める。

「行こう」

何人かが未希たちのそばにも座り始めると、槇名がそう言って二人は席を立った。

「近くに車を停めてある」

店を出ると、槇名はそう言って足早に歩き始めた。

一つめの角を曲がった二十四時間パーキングに、黒のRX―8が停めてあった。

「この車？」

「そう。若過ぎる趣味だろう。妻の好みだから仕方がない」

その言葉で、未希は改めて槇名が妻帯者だったことを思い出した。

スターター・ボタンを押すと、未希が聞いたことの無い軽いモーター音がして爆発的にエンジンがかかった。

「変わった音がする」

「市販車で、世界唯一のロータリー・エンジンだからな」

「ロータリー？」

「ガソリンの爆発力を直接回転運動に変える夢のエンジンさ。ただ現実には理想とは違って燃費なんかも普通のレシプロエンジンと大差はない」

そういつて榎名は、カー・ナビゲーションに高橋の店の住所を入力し車を発進させた。

「ラジオをつけていい？」

未希が尋ねる。

榎名が肯いたので、未希はラジオのスイッチを入れた。

クラシック音楽が流れ始める。

その種の音楽には詳しくないが、それは未希が聞いたことのない美しい曲だった。

「きれいな曲……」

『『亡き王女のためのパヴァーヌ』だ。二十世紀初頭にフランスのモーリス・ラヴェルが作曲した』

そこで、榎名は、いったん言葉を切って、

「シートベルトを締めて」

といった。

未希はシートベルトをしていなかったのだ。

「面倒でも、シートベルトはしておいた方がいい。一応エアバッグも出るが、体を椅子に固定しておかないと、バッグで顔を直撃することになり、危険だ。頭の打ち所によっては様々な記憶障害が起こる。いわゆる高次脳機能障害が」

「くわしいのねえ」

「武道、特に合気道のような防具を使わない武道をやっていると、頭の打ち所が問題になることが多い。脳天から真つ逆さまに床に落ちると、右側から落ちると、左側から落ちるのでは、脳に対するダメージが違う。だから研究熱心な武道家は脳障害に詳しくなる」

「壊すために脳の勉強するなんて怖い」

「怪我を避けるために勉強するのさ。どう頭を強打すると危険かを知ること
は、結果的に、それを避けることになる」

槇名は前を向いたまま話し続ける。

「さつき、君が、きれいな曲だと言った『亡き王女のためのパヴァーヌ』を二十四歳の時に作曲したラヴェルは、晩年に自動車事故にあった。事故により記憶障害起こした彼は、この曲を聴いて『とてもすばらしい曲だ、いったい誰が書いたのだろう』と言ったといわれている」

「そんな……」

二人は、しばらく黙り込んだ。

やがて槇名が話し始める。

「脳は様々な原因でダメージを受けるが、大別すると二つに分かれる。怪我によるものと薬物によるものだ」

「薬物って、ドラッグ？」

「それもある。あとはバルビタールのような睡眠薬、ジアゼパムのような抗不安薬、クロルプロマジンのような抗精神病薬、イミプラミンのような抗鬱薬も大量摂取すると害があると言われている」

「睡眠薬もそうなの」

「薬は、基本的にはコントロールされた毒物と考えるべきものだ。現在の脳機能の捉え方は、発達した神経繊維ニューロンに、さまざまな微量ホルモン、脳内麻薬物質が作用して働いているというのが一般的だ。つまり化学物質が

脳全体をコントロールしていると考える。

昔、人工知能といえば、コンピュータに複雑なプログラムを書き込んで完成する、と考えられていた。

今もそう考える者は多いが、個人的には、いくらコンピュータが速くなり、記憶容量が大きくなって複雑なプログラムが組めるようになっても、人間のような知能は望めないと思っている。

もし『人工知能』を作りたいなら、人工細胞で演算装置を作り、そこへ、外部からエンドルフィンなどの脳内麻薬物質を作用させるという形にすべきなんだ。

イメージ的にいうと、人工の白い脳に脳内麻薬物質の詰まったタンクがいくつも埋め込まれているという感じだ。

もし機械的なマシンで作るなら、そういった脳内麻薬物質の働きをする別プログラムを組み込まねばならない」

「よく分からないなあ」

未希はため息をついた。

おそらく、この人は、いつでもどこでもこうなのだろう。

未希は、こんな話ばかり聞かされている槇名の妻が可愛そうになった。

「分からなくていいさ。これは独り言みたいなものだ。ただ、ひとつだけ覚えておいて欲しいのは、脳が、今言ったような複雑な化学薬品の混ぜ合わせによって機能している、ということだ。麻薬はその薬品のバランスを崩すことで幻覚を見せたり、気分を高揚させたり落ち込ませたりする。

一度、精妙なバランスを、そういった乱暴な力で壊せば、元に戻すには並々ならぬ力が必要になる。つまり、『麻薬には絶対浸るな』ということさ……さあ着いた。ここだ」

未希が、窓の外を見ると、高橋精二の店「アウトバーン」の看板が夕陽に光っていた。

「やっぱり警察に連絡しようよ」

車を降りた未希が叫ぶようにいう。

「後でいい」

落ち着いた声で槇名が答える。

「だって……」

「君は店の外で待っていてくれ」

ゆっくりと店に向かって歩いていく槇名の背中を見つめながら、未希は悪夢を中にいるような気になってきた。

針金のように瘦せた槇名が、ヤクザが何人もいる組組事務所へ、ひとりで乗り込もうというのだ。

尋常な神経だとは思えなかった。

いくら合気道ができて、多勢に無勢、それに槇名は……

「あっ」

未希は声を上げた。

その時初めて、彼女は、今日の槇名の息から酒の匂いがしていないことに気づいたのだ。

振り向くと、槇名は店の扉をあけて中に入っていく所だった。

未希が遅れて店に入ると、すでに闘いは始まっていた。

というより、いきなり槇名が攻撃を始めたというのが正解のようだ。

「あまりに見事な動きを見ると、誰でもできる簡単な仕草に見えるものだよ」

槇名の動きを見て、幼い頃、新潟の祖母が、未希に踊りの稽古をつけながら言ったことを思い出す。

未希の見たところ、槇名は何も変わったことはしていないように見えた。

長い手を伸ばして相手を掴む、ちよつと押し、引く、それだけで相手が弾かれるように回転し床に伸びる。

あるいは、利き腕の関節を外される。

考えられない方向に回ってしまった腕をダラリと下げ、肩を、肘を押さえ、て呻く男たちは、すでに闘う意欲を失っていた。

数秒後には、店にいた男たち全員が間接を外されていた。

突然、大きな音がして事務所のドアが開かれ、スキンヘッドの男が現れた。

「アニキ！」

肩を押さえ、転がる男たちが口々に叫ぶ。

「なんだ、お前はあ！」

男も叫んだ。

「槇名さん！気をつけて」

悲鳴のような未希の声が店内に響く。

男が日本刀の抜き身を手にしていたからだ。

だが、槇名は迷うことなく男に近づいていく。

「死ねやあ」

男は、叫びながら刀を振り上げ、槇名をまっぶたつに切り下げた。

「きゃあ」

未希が悲鳴をあげた。

だが、槇名は斬られてはいなかった。

刀は槇名に届いていなかったのだ。

振り下ろそうとする刀の柄を、男の懐に飛び込んだ槇名の掌てのひらが下から突き上げ、刀をはじき飛ばしたのだ。

さらに、なめらかな動きで、そのまま体ごと男に当たると、槇名の腕は、蛇のように男の利き腕に巻き付いた。

次の瞬間、腕を軸にして男は綺麗に回転し頭から床に落ちた。

が、頭が床にあたる直前に、槇名が男の背中を軽く蹴ったため、結局肩から床に激突する。

嫌な音が部屋に響いた。

折れるか、肩が外れるかしたのでろう。

「上段から斬ろうとしては駄目だ。こんな時は突くんだけ。そうすれば少し困っただろう」

うなり声を上げるスキンヘッドに槇名はいった。

「武道をやっている人って、みんなそんなに乱暴なの」

ほっとしながら未希は毒づく。

「時と場合による」

答えながら、槇名は「アニキ」と呼ばれていたスキンヘッドの、外れていない方の腕を取りひねり上げた。

「高橋はどこにいる」

槇名は無表情に問いかけた。

「い、いてっ、言う、言うから止めてくれ」

大男が叫んだ。

「だ、第二マンションにいるはずだ」

「第二、何だ？」

「目黒にある、二番目の住まいだ。引っかけた小娘を連れ込むのに使っている……い、一緒にヤクをやることもある」

槇名の片眉かたまゆが吊り上がった。

「高橋は、自分もドラッグをやっているのか？」

「そ、そうだ」

「マンションの名と部屋番号を聞こう」

男がつぶやき、槇名は腕を放した。

男は床に突っ伏して、そのまま動かなくなった。

教えられたマンションに着くと、時刻は午後九時を回っていた。

エレベーターで四階に上がり、教えられた部屋番号のドアノブを回すと、抵抗無くドアは開いた。

躊躇ちゆうちよせず槇名は部屋の中に入って行く。

未希は後に続いた。

部屋には、誰もいなかった。

灯りはつけっぱなしで、テーブルの上には酒とつまみが置かれている。

アイスペールの中の氷は全く溶けていない。

ついさっきまで人のいた気配がある。

「どこかに出かけたのか」

槇名が呟いた。

「少なくとも、店から連絡が来て逃げたんじゃないわね」

あれから槇名は、男たち全員の間接をもとに戻すと荷造り用の紐でしぼり、ドアに鍵をかけてきたのだ。

「まるでマリー・セレスト号みたい」

「よく知っているな」

槇名が微笑んだ。

「この間、テレビでやってた」

部屋の中を探しても高橋の姿はなかった。

「エントランスまで出てみよう」

槇名の意見で二人は部屋を出た。

「こっちだ」

エレベーターの前に立つ未希に、槇名は非常階段を指さした。

「今、エレベーターは最上階の十六階にある。だから、高橋はエレベーターには乗っていない。階段を使えば高橋と行き違うことはないはずだ」

「エレベーターがあるのにわざわざ階段を使うかな」

階段を下りながら未希は尋ねた。

「気の短い人間なら、四階程度であれば階段を使うさ。話を聞いていると、

高橋の気が長いとは思えない……あれは？」

槇名が立ち止まる。

未希も槇名の肩越しに階下をのぞき込んだ。

青っぽい蛍光灯に照らされて二階の踊り場に男が倒れていた。

足下には、白いコンビニの袋と、そこから飛び散ったらしいビールやつまみの袋が散乱している。

近くまで行くと、それが高橋であることが、未希にはわかった。

大柄な体にまとったイタリアンスーツに黒のシャツ。洒落たファッションはいつと同じだが、肢体は異様な形にねじれていた。

まだ息はあるようだが、頭からかなり出血している。

呼吸は浅かった。

「ちよつと！」

「さわらない方がいい」

未希が体に触れようとするのを槇名が止めた。

「頭を打っているようだ。動かさずに、このまま救急車を呼ぼう」

十五分ほどで救急車がやってきた。

その間、槇名はどこかに電話を掛けていた。

ほぼ時を同じくして警察がやって来る。

若い男と年配の男の二人組の刑事だ。

「あなたが発見者？」

年配の刑事が未希に尋ねる。

「え、ええ」

横目で槇名を見ると、救急隊員と何か話している。

「そうです」

「怪我人の名は分かりますか？」

「高橋精二という人です」

「顔見知りですか？」

「ええ、そうとも言えるし……そうです」

未希の煮え切らない返事に、刑事が不審の色を顔に浮かべた。

「早いね」

槇名がやって来て刑事に声を掛けた。

二人の刑事の顔つきが変化した。

「あ、先生。どうして先生がここに」

「ちよっと事情があつてね。詳しいことは署に行つて話すよ」

「恐縮です」

「それで、彼女も行かないと駄目かな」

槇名は未希を示した。

若い刑事は困った顔になり、

「先ほどの事情というのは、つまりこれが事件ということですか？」

「いや、わたしも彼女も高橋の怪我には無関係だ。我々は、彼に会いに来て、

怪我をしている彼を発見しただけだ」

「そういうことでしたら。この女性は、帰っていただいで結構です」

「彼女の住所は知っている。もうすぐ迎えも来るはずだ」

しばらくして、マンションの前に赤いプジョーが停まった。暗くてよく見えないが、ドアを開けて人影が滑り出るのが見える。

集まりつつある野次馬をかき分けて、背の高い女性が近づいて来た。

「里中先生」

年配の刑事が嬉しそうな声を上げた。

「由衣先生」

未希も叫んだ。

「この女性は先生のお知り合いでしたか」

若い刑事が未希を示して由衣に尋ねる。

「そうよ。私の友だち」

里中由衣はそう答えると未希に向かって微笑んだ。

「大丈夫？未希ちゃん。大変だったわね」

「凄いなあ、先生は。警察の人にも顔が利くんだ」

助手席から、窓の外を流れるネオンを見ながら未希はいった。

「プジョーは未希のマンションに向かって走っている。」

「実際には、私が知り合いという訳ではないのよ」

由衣は呟くようにそう言うと、しばらく黙り込んだ。

「ねえ未希さん」

やがて、意を決したように由衣が口を開いた。

未希は来た、とばかりに首をすくめて答える。

「分かっています。もうやりません」

「え、ああ大麻のこと？そう、もう絶対に吸ってはいけないわ。でも、私はそのことは心配してないの。あなたのことも、警察に対しては、きっと彼がうまく処理してくれるから大丈夫よ」

「じゃあ、何の話ですか？」

「あなた、前に槇名さんに、医者やその家族ならドラッグが簡単に手に入るって言ったそうね。新聞記事でそんな話を読んだって」

「ええ」

答えながら心の中で榎名に軽く毒づく。

——なんだって、由衣先生に告げ口するのよ。

「その死んだ女性の名前、覚えてる？」

「覚えてません」

「そう……」

「それが何か？」

「榎名芽衣、それが、夫のモルヒネを打って死んだ女性の名よ」

「え！」

未希の顔色が変わった。

「もう分かるわね。その女性は榎名晃司の妻。そして私の姉なの」

あつと未希は思った。

一度に、多くの謎が解けたからだ。

榎名が、なぜ酒を飲み続けているのか。

なぜ、高橋たちの捜査を警察任せにせずに自分でやろうとしたのか。

また、高橋の事務所で、危険をかえりみずヤクザに立ち向かったのか。

麻薬を扱うヤクザを捕まえることは、自分の持っていた薬で死んでしまっ

た妻への弔いの意味でもあったのだろう。

あるいは、榎名は死にたがっていたのかもしれない。

今思えば、榎名の行動には、危険に命を投げ出して、もし死ぬならそれも

構わないという、投げやりなところがあった。

「そうだったんだ」

呆然と未希は呟いた。

「でも、でも、あの人は自分の仕事は合気道の師範だって」

実際、榎名は尋常ではない強さだった。

「もちろん、彼は、義兄は合気道の師範よ。お父様は警視庁で稽古もつけて

おられるし、彼が若先生として代わりに指導することもある。でも、義兄の

職業は医者なの。専門は――」

「脳外科でしょう」

「その通りよ。でも、彼は、あの事件以来、ずっと投げやりになって病院を休んでいるの。お酒ばかり飲んで。だから、職業が合気道師範と言ったんでしょうね。」

でも、もう大丈夫。彼は生きる力を取り戻したわ。さっき見た目の光でわかる。もう、お酒も飲んでいないみたいだし。人は、人を助けることで生きる力を取り戻すものだから」

「じゃあ、由衣先生は、槓名さんを立ち直らせるために私を？」

「利用させてもらった、っていったら怒るかな」

「そんな……感謝してます」

未希は素直に頭を下げた。

翌日、未希は槓名に連絡をとった。

昼過ぎに、先日の喫茶店で待ち合わせる。

三十分以上前に店に着き、今度は、奥ではなく、通りに面した窓際に座り、ガラス越しに、忙しげに通りを行き過ぎる人をぼんやりと眺めて待つ。

時間通りに槓名は現れた。

「槓名さん、お医者だったんだ」

開口一番、未希はいった。

「そうだ」

「合気道の師範でもある」

「そう」

「だから、救急隊員に指示をした」

「彼らとは顔見知りなんだ」

しばらく沈黙があった。

やがて未希はいった。

「あの……奥さんのことだけど」

「気にしなくていい」

落ち着いた声で槇名は言った。

なぜか、それだけで未希は胸がいつぱいになる。

珈琲をふた口すると、ようやく未希は、次の言葉を口にすることができた。

「彼は、高橋精二はどうなったの？」

「朝から病院に行って来たよ。命は助かるそうだ」

「でも、どうして、あんなことになったんだろう」

未希の声は暗かった。短い間だが付き合った男なのだ。

「彼の血液から、テトラヒドロカンナビノールが検出された。

大麻の麻酔・幻覚成分だ。足下に紙に巻いた大麻も落ちていた。

おそらく、大麻煙草を吸いながら、買い出しから帰る途中に、階段を踏み外したんだろう。ヘロインのような強い麻薬を扱う者にとって、どうしても

大麻は軽い麻薬に見えてしまう。煙草程度に思ってしまうこともある。

だが、やはり大麻も麻薬、いくら慣れて体に耐性が出来ているとは言っても、くわえ煙草で荷物を持って階段を上がるというのは無謀だったんだ。自業自得といえればそれまでだが」

「死なないんでしょう」

「おそらく。だが、かなり重度の障害が残る可能性がある」

「重度……」

「ラヴェルだよ。記憶に障害が残る。起こったことのすべてを証言できない可能性が高い」

「そうですか」

「レントゲンを見せてもらったが、左の側頭葉が破壊されていた」

「左？」

「言葉を司る部分だ。それが見事に高次納期脳障害を起こすような形で傷ついている。あれでは元には戻らないだろう。側頭葉には記憶に関わる部位もある」

零囲気が重苦しくなり、槇名は話題を変えた。

「鳴海君は大丈夫なようだ。もともとスポーツで鍛えた頑丈な体だ」

未希は肯うなずいた。

朝から鳴海の入院する病院に見舞いに行ってきたのだ。

鳴海は意識を回復していた。

短い時間ではあったが、面会が許されたので、未希は彼に謝ったのだった。

鳴海は、快く謝罪を受けてくれた。

今後の二人の関係が、どうなるかは分からないが、それほど悪いものではないだろうと今の未希は思っている。

「ともかく、これでひとつヨーロッパ経由の麻薬のルートがなくなったわけね」

「そういうことだ」

槇名が、さっぱりした顔で窓の外を眺めながら答えた。

未希も同じように行き交う人を眺めるが、気持ちは沈んでいた。

明日から、槇名と同じ景色を見られないことが少し寂しかったのだ。

一ヶ月後、山本未希は、築地病院に槇名晃司を訪ねた。

待合室に白衣を着た槇名が現れると、そのまま歩いて建物の外に出て、人気の無いベンチに並んで座る。

未希は、改まった口調で、職場復帰おめでとうございます、といった。

腕の良い脳外科医が東京に戻って来るのは良いことだ、と顔をほころばず。

その後、すぐに表情を引き締めて、月末からニューヨークに留学することになったことを告げた。

槇名は、大きくため息をついた。

「なに？そのため息は」

そういいながら、その息に酒臭さがないことに未希は安堵する。

「君の父親も愚かだ。麻薬事件に巻き込まれた娘を手元に置いて、しばらく監視するというのならともかく、さらに遠いニューヨークに留学させるとは。あのあたりは、東京とは比べものにならないほどドラッグに溢れていることを知らないはずは無いだろうに」

「槇名さんは、すぐにそれだ。だいたい——」

未希が抗議する。

「だが」

槇名は未希の言葉を遮り、続けた。

「嫌な記憶を忘れ、新しい土地でやり直すのは良いことだ。がんばれよ」
未希はうなづく。

「向こうでデザインの学校にも通うし、第一、今度は独り暮らしじゃないの。なんでニューヨークかっていうと、私のおばさんが住んでるから。おばあちゃんが一番のお気に入りだった日本文化の塊みたいな人。向こうのカルチャー・スクールみたいところで、外人相手にお茶とお華を教える」

「鳴海君が寂しがらんじやないか」

「そうだろうな。でも、今はスカイプもあるから」

未希は、パソコンを使って無料で海外とテレビ電話が使えるシステムの名を挙げ、

「それに、これからどうしていくか、離れた場所で、お互い考えるのも良いことだし」

「そうか……ニューヨークに行くか」

槇名は感慨深げにそういうと、

「では、手向けに、ひとつだけいっておこう。麻薬の種類は多く、誘惑も多い。売りつける側は、様々な甘言を弄して君を誘惑するだろう。外国暮らしで寂しくなることもあるかもしれない。だが、負けるな。そんな時は、今回の事件を思い出せ。何より危険なのは、違うクスリなら、あるいは、今回は前と違ってもっと別な経験を出来るのではないかという好奇心だ。すでにひとつ経験していれば、新しいタイプに手を出すのはたやすい」

「大丈夫よ。クスリはもうこりごりだもの」

未希は笑った。

「若い子なら好奇心で薬に手を出さだろうけどね。わたしは今回のことで、すっかり歳をとっちゃったから。精神的には、もう中年のオバさんって感じ。保守的なオバさん。未知のものには恐がりにもなったしね。だから好奇心で自分から薬に手を出すなんてあり得ない。騙されない限りはね」

そこまで言って、未希は、そうだと手を叩いた。

「もし槇名さんが、どうしても心配だつていうなら、槇名さん名義の生命保険に入つてあげる。うん、それっていいかも。私が死んだら、命の証のお金を槇名さんが受け取ってくれる。ちよつとうれいって感じだな。何となく精二の考えが分かる……ちよつと、槇名さん、どうしたの」

未希は、槇名の顔色が突然蒼白になったことに驚いて叫んだ。

「そう、そうだったのか。だが、今となつてはもうすべてが遅い……」

うつろな目でそういうと、

「すまないが、これで失礼させてもらう」

槇名は、夢遊病者のように立ち上がり、呆然とした足取りで去っていった。

独り、ベンチに残された未希は、訳が分からないまま、赤い煉瓦ブロックの瀟洒な小道を去っていく細長い影を見つめていた。

「どうしたの未希ちゃん。こんな朝早くから」

そういながら里中由衣がマンションの扉を開けた。

午前七時過ぎだというのに、すでに化粧を終えスーツに着替えている。

いつもながら、全く隙を感じさせない穏やかで理知的な表情だ。

「あかし、今日の昼過ぎの便でニューヨークに発ちます」

「ああ、出発は今日だったわね。あれから色々あったから、お話もできないままだったけど、その様子だったら大丈夫ね。きっと向こうでも、うまくやっついていけるわ」

「ありがとう。由衣センセ。でも、今朝、ここに来たのは、旅行のお別れをいいに来たんじゃないんです」

未希はうつむいた。

「どういうこと」

「ひとつだけ聞きたいことがあって」

「なにかしら」

「入って良いですか」

「どうぞ」

玄関に入ると、未希は靴を脱ごうとはせず、黙って由衣を見つめた。

「なに、どうしたの？上がないの？」

「……」

「どうしたのよ。聞きたいことってなに？」

「先生は、そんなに榎名さんが好きだったんですか？実のお姉さんを麻薬中毒にして自殺させてもいいくらい」

「何の話かしら」

由衣は表情を変えなかった。

「結局、精二には、ひどい脳障害が残りましたね。言葉すら満足に話せないほどの」

未希は話題を変えた。

「そのようね」

「でも死ななかった」

「障害が残るのは不幸だけど、命が助かって良かったわ」

「それは、由衣センセにとってですか」

「え？」

「もし、彼が死んでいたら、センセは望まない大金を受け取るようになったんでしょう？」

「……」

「数年前なら、申請しなければ保険がおりることなどなかったはず。でも、ここ何年かの保険金未払いの不祥事で、保険会社は支払うことに異常に熱心になってる。先生にとって不幸なことに」

由衣は黙ったままだ。

「高橋から保険金が支払われるということは、すなわち先生と彼との間に何らかの関係があったということの証^{あかし}。彼の癖を知るものにとっては、明らかにそういうことでしょう。例えば先生が知らない間に、彼が保険契約を結んだと言っても、世間はそうは思わない。だから、先生は、高橋を殺さずに、社会的に葬^{ほうむ}ってしまおうとした」

由衣は薄く微笑んだ。

「最初に引っかけたのは、榎名さんが、高橋の側頭葉が『見事に高次脳記憶障害を起こす形に傷ついている』と言ったことでした。

何となく、その言葉が頭に残って離れなくなっただんです。

ある人の顔とセットになって。

だって、あたしが知っている人で、そんなことができるのは榎名さんと、その人だけだったし、榎名さんは知らないけれど、あたしは、不安になって、高橋に会いに行くことをその人にメールで教えてしまっただんですから。

槇名さんが喫茶店の奥で電話をしている間に。

そうでしょう、先生。

それで、こう考えたんです。

もし、あれが事故でなく、故意にああいう状況にされたのなら。

つまり、高橋に怪我を負わせるのが目的なら、犯人は、何が望みだったの
だろう、と。

あれほどの大けがをさせるなら、殺してしまっても同じはずです。

初めは臓器が欲しいのかと思いました。新鮮な臓器が欲しくて、頭を狙っ
て殺そうとしたが殺せなかった、と」

「それはないわね」

「ええ、高橋精二は、ドナー登録をしていなかった。というより、麻薬の常
習者だった彼は、そもそも臓器登録自体ができなかった」

「よく知ってるわね。二ヶ月前とは別人みたい」

「必死に調べましたから。先生が犯人じゃないことを証明したくて」
未希が声を震わせた。

「そして気づいたんです。彼が死ねばどうなるのかを。」

彼が自分自身にかけていた保険金が、付き合っている女性に支払われる、
ということに。

高橋の癖は、彼を知っている者なら、みんなが知っていることです。

でも、おかしいですよ。もし彼との関係を隠しておきたいのなら、わた
しのように別れてしまえばいい。彼は自称プレイボーイだったんだから、し
つこく女を追いかけたりしないでしょう？

別れたら、彼は保険を解約するだろうから、その後で殺せばいい。

その方がずっと簡単です。

でも、もし彼が、その女性に執着して別れようとしなければ、あるいはそ
うさせる時間的な余裕が無ければ……」

「生かして記憶だけ消せばいいっていの？無理よ」

由衣は小さく笑った。

「そう、本当に、殺さずに記憶障害だけを残すなんてできるんでしょうか？調べてみたらできるんですね。正しい場所へ、適切な衝撃さえ加えれば可能です。」

もちろん、普通の人なら不可能でしょうけど。

やりすぎて殺してしまうか、中途半端に記憶が残って証言されてしまうかのどちらかになる。

でも、脳の正しい知識があり、冷静沈着な人物なら可能なんです。

例えば、心理学を専攻したカウンセラーの里中由衣なら。

センセは以前、カウンセリングの時に、あたしに言いましたよね。

最近の心理学は、脳を機械として捉える大脳生理学に近づいているから、まるで医学生のような勉強をしたって」

由衣は、軽く頭を振った。

「それが可能かどうかは置いておくとして、未希ちゃん。あなた肝心なことを忘れてるわよ。なぜ、わたしが高橋精二を殺さなければならぬの」

「それはさつき言いました。あなたがお姉さんを、槇名さんの奥さんを、麻薬中毒にして殺したからです」

「なんてことを……」

「あれから、あたし、槇名先生の奥様のことを調べたんです。センセーションな事件だったから、新聞や週刊誌にたくさん情報が残っていました。」

槇名芽衣まきめいめい、先生より二つ年上のお姉さん。

名門お嬢様大学の、清心女子大の英文学を卒業された、秀才ではなかったけれど、気だての良い、誰からも好かれる女性。

二十四歳で槇名晃司に出会い結婚。

六年後、夫の勤める病院を訪ね、モルヒネを持ち帰り、その多量摂取によ

り死亡」

未希はそこで言葉を切った。由衣を見つめる。

「でも、これってどこかおかしいですよね。」

確かに、当時、榎名さんは仕事が忙しくて家庭を顧みることができなくなっていたし、奥様の芽衣さんは、家で寂しく過ごしていたのかも知れませんか。

でも、普通の主婦が、それも、お嬢様育ちの女性が、いきなり夫の病院へ出かけて、嚴重に保管されているはずのモルヒネを持ち帰って使うのでしょうか？」

未希は由衣を見つめた。

「一年前に、芽衣さんは、寂しさから少し鬱気味になって、妹である先生のカウンセリングを受けていますね」

「そうよ。他人より、気心の知れた妹の方がいいと姉がいったから」

「その際、先生は、精神安定剤と偽って、高橋から手に入れたヘロインをお姉さんに飲ませた。たぶん、何か混ぜものをして、急に効き過ぎないように工夫をして。一種のデザイン・ドラッグですね。」

そして、充分に中毒になった頃を見計らって、薬を渡すのをやめるんです。その頃にはお姉さんも、渡されていたのが普通の薬でないことは分かっているでしょう。

でも、もうどうすることもできない。

そして、あなたは囁くんです。

あなたの夫の職場にモルヒネがあるわよって。同じように打ったらいいって。それが、ヘロインより遙かに毒性が強いことは教えずに。

それで、あなたはまったく手を汚さずに恋敵を葬ることができる。まさに完全犯罪。

ただ、ひとつだけあった誤算は、その結果、愛する男性が生きる力を無く

してしまったこと。

でも、そこは、さすが有能なカウンセラー。顧客の中から適当な相手を見つけて、立ち直らせるきっかけを作ることにした。

まさか、その娘が高橋と付き合っていたとも知らずに……」

「見てきたように言うわね」

「あたし調べたんです。そして分かりました。先生のもとには、カウンセリングを受けるために、毎日のように、様々な人が訪れます。

だって『里中由衣カウンセリング・クリニック』ってすごく有名なもの。

あたしも、親子の仲がうまくいかなくなつて困っている時に、新潟の父から、東京に良い先生がいるらしい、と教えてもらったんだもの。

そして、その患者さんの中には、高橋からクスリをもらっていた人もいたはず。その人から得た情報で、先生は高橋に近づいた。お姉さんを葉漬けにするために」

「あなたの想像力には感心するわ」

「町田真奈美」

「え！」

「ご存じですよ。二年前に、高橋が例によって、保険をかけてつきあっていた女性です。そして先生の患者でもある。あたし言いましたよね。調べたんですよ。証言ももらっています。いくら高橋が証言できなくなつても、高橋の部下が先生の顔を見ていなくても、高橋と先生とのつながりはもう隠せません。

一年以上前から、先生は高橋と付き合っています。

だから、保険も一年以上かかわれている。高橋が、もし死んでいれば、保険金で先生と彼との関係が明るみにでていたでしょう」

「よく、そこまで調べたわね」

「興信所を雇いました。幸いお金はありますから、調べる方向さえ分かれば、

あとは簡単でした。以前、先生からよく言われたけど、これが、多分、初めてあたしが使った『生きたお金』ですね」

「お嬢様を侮ってはいけない、というところかしら」

由衣は笑った。

「もし、高橋の怪我の場所が特殊でなければ、そして、先生にメールを送ったことを、あたしが思い出さなければ、おそらく高橋が話すことも思い出すことも出来なくなった時点で、犯人どころか、ふたつの犯罪すら消滅していただろうと思います。先生はやっぱりすごい人です」

「それで、あなたはどうするの？警察に告発する？いったい何の罪で？私と高橋が関係していたからといって、私が彼に怪我を負わせたという証拠にはならないわ。姉が義兄のモルヒネを打って中毒死しても、わたしのせいじゃない」

「もちろんわかっています。ただ、あたしは知りたかったです。本当のことを」

由衣の顔から神秘的な微笑みが消えた。

「なぜ？とあなたは聞いたわね。なぜ姉をおとし陥れたか？そう、私が姉を死に追いやったのよ」

ざわ、と未希の肌が総毛だった。

ついに、由衣が認めたのだ。

「憎かったからよ。生まれた時からずっと。物心ついた時から、世界は姉を中心に回っていた。幼い頃から両親は姉を可愛がり、私は殊更特別無視された」

由衣の目が、怪しい輝きを帯び始めた。

「知ってる？心理学のレポートに面白い結果があるの。それによると、ほとんどの親は、子供が複数あると、無意識に、そのうちの誰かを愛し、他の者を邪険に扱うというの。そんな経験はない？」

「一人っ子だからわかりません」

「そう、残念だわ。とにかく成績も運動もピアノも、私の方が遙かに優秀だったのに、いつも我が家で話題になるのは姉ばかりだった。運動会の徒競走で、姉が三位になって私が一位になると、その夜、夕ご飯を食べながら、私の両親は、いかに姉が頑張ったか、ということばかり話すのよ」
由衣は憑かれたように話し続けていた。

「高校になっても、そんな状況は変わらなかった。でも、その頃には、長い間、両親の関心を引こう、親の気持ちを理解して好かれる子供になろうと考へ続けていた私は、自然に心理学の道を歩み始めていたわ。」

東都大学心理学科四年の時、私はレポートをまとめるために、都主催の脳生理学会に参加した。

そこで榎名晃司に出会った。

そう、会ったのよ。私が先に。

当時、まだ彼は講師だったけど、脳外科とその研究に関する彼の評価は高かった。

私は彼に脳の機能分布について質問した。彼は丁寧に答えてくれた。

その後、何度か、彼を訪ねて私は研究室に行き、ある日、家に招待したの。

その頃から痩せていた彼に栄養をつけさせようと思って。

それが間違いだった。

女子校から女子大に進んで、男子学生とろくに話もしたことはなかった姉に、私は、いつも榎名晃司の話をしていたの。

今から思えば、ちよつと自慢したかったのかも知れない。

でも、そのおかげで、姉は、彼に初めて会う気がしないと書いていたわ。

そして、私は、ふたりを引き合わせてしまった。

姉が、彼のことを好きになったのは、見ていてすぐに分かったわ。

でも、驚いたのは、いえ、ショックだったのは、彼が決して私の前では見せない笑顔を姉に対して見せたことだった。

それから数ヶ月して、姉が私にプロポーズされたことを伝えたの。

今思えば、その時が一番姉を殺したいと思った瞬間だったわね。

なぜ？私だって姉と変わらず綺麗なはずよ。なにより、私は彼と研究の話ができる。姉は、彼の話していることの半分も理解していなかったはずよ」

徐々に、由衣の声のトーンは下がっていった。

「一年前に、姉のカウンセリングをした時、やっぱりって思ったわ。姉では晃司さんについていけない。彼には、私のような専門知識をもつパートナーが必要なよ。彼としばらく一緒にいて、あなたも分かったでしょう」

「そうかなあ」

未希が呟いた。

「男の人って、自分が話すことを、愛する人に全部理解してもらいたがるものなのかしら。あたしは違うと思う。槇名さんは、すごく色々話すけど、それは、ただ自分の考えをまとめるために話しているような気がしたもの。

あの人に本当に必要なのは、話を理解して、間違いを指摘し、助言をする女性ではなくて、優しい笑顔でその話を聞いてあげる人じゃないでしょうか」

「なっ、何も知らないくせに。あなたに男と女の何が分かるっていうの？研究者の何が分かるっていうの？」

「わかりません。ただ、そう思うだけです。芽衣さんも、慌てずに、もうすこしゆつたりと槇名さんを待ってあげたら良かったんじゃないかなって」

「わたしはそうは思わない」

由衣は冷静な声を戻って言った。

「今の話、彼にはしたの？」

「してません。でも、もう槇名さんは知っているはずです。知っていて何も知らない。あの人はそういう人です。警察じゃないし、高橋も、やってきた行いを考えたら、重すぎる罰ではあるけど、報いを受けたのだと考えるでしょ

う……芽衣さんに関しては、おそらくあの人は、自分の責任で奥さんを死なせたと思って自分を責めるでしょうけど、あなたは責めないでしょうから」

未希は、なぜか溢れてきた涙を拭いた。

「ただ、ひとつ言えることは、槇名さんはあなたを責めはしないだろうけど、決して、一生許さないだろうということですよ」

由衣はふっと笑った。

「どうしました？」

「今のあなたを見て、『人は徐々に成長するのではなく、段階的にひといきに成長するものだ』という大学時代の恩師の言葉を思い出したのよ。大したものだよ」

「あたしは何も分かっていません。ただ自分勝手に槇名さんの気持ちを推理をしているだけ」

「分かるわ。あなたも好きなのね、彼が。でも駄目よ。あの人の心には、誰も住めない」

「分かっていきます」

硬い表情で未希は答えた。

「では、タクシーを待たしているので失礼します」

そう言って未希は扉を開けた。

出て行こうとして、思いついたように振り返る。

「由衣センセ。あなたは、いつもあんなに輝いて、いつでも一番で、一番力ツコよくて、素敵で、あたしの憧れで目標でした。あたしのことを、可愛がってくださってありがとうございます」

そう言って未希は頭を下げた。

「さようなら」

振り返らずに未希は歩き始めた。

空港には、予定より一時間早くついた。

早すぎるから、誰もいないだろうと思ったが槇名だけは待っていた。大きなスーツケースごと、ロビーにある喫茶コーナーに移動して座る。そこからなら、後からやってくる見送りの人を容易に見つけることができるからだ。

店員に飲み物をオーダーすると、二人の間を沈黙が支配した。

未希は何も言わなかった。

槇名も黙ったままだ。

お互い、言うべき言葉が見つからないのだろう。

やがて、間が持たなくなつて、未希はハンドバッグから煙草を取り出した。

「煙草はやめてくれ」

ライターで火をつけようとする槇名が遮った。

「奥さんに止められているものね」

悪戯っぽく片目を瞑つて、未希はライターの蓋を閉じる。

「違う。君は未成年だし、煙草は体に良くないからだ」

槇名は生真面目な表情を崩さずに答えた。

「じゃ、やめる」

「いい娘だ」

やがて、熱い珈琲が届けられ、二人でそれを飲んだ。

たくさんの想いが、未希の喉から溢れようとするが、なぜかひとつも言葉にはならなかった。

思い切つて口を開こうとした瞬間、ロビーの入り口に、学校の友達や鳴海孝史が現れるのが見えた。

気持ちに反して未希は立ち上がり、皆に見えるように大きく手を振る。

未希が、ニューヨーク・ラガーディア空港に着くと訃報が待っていた。

里中由衣の運転する赤いプジョーが、深夜の首都高速でハンドル操作を誤り防音壁にぶつかる事故を起こしたのだ。

衝突時、プジョーは二百キロ近いスピードを出していたため、運転していた里中由衣は即死だった。彼女はシートベルトをしていなかった。

二週間後、由衣が、自分自身に掛けていた二億円もの高額保険金の受け取り人が槇名晃司になっていることが保険会社から知らされた。

槇名は、いったんは辞退したものの、結局は、金を受け取り、全額を高次脳機能障害に苦しむ患者支援の基金に寄付したとのことだ。

その事を、鳴海孝史から知らされた未希は、セントラルパークの池で、アイススケートに興じる子供たちを眺めながら、ひとり物思いにふけていた。

由衣は、どういふつもりだったのだろう。

よもや、高橋のように保険金で、槇名の気持ちを繋ぎ止めることができる考えたわけではあるまい。

あるいは、と未希は思う。

決して自分を愛の対象として見てくれない槇名に対して、自分がいなくなったあと、その命の代価とも言うべき保険金を示し、受け取らせることで、自分の気持ちを示したかったのかもしれない。

だけど——未希は頭を振ると、池の周りを歩き始めた。

やっぱり、あたしは頭が悪いし、まだ子供なんだ。

白い息を吐きながらそう考える。

もっと大人になれば、里中由衣の考えていたことを理解できるようになるだろうか？

まったく、悲しいほど自信がなかった。△▽

最後までお読みいただきありがとうございました。

感想などございましたら、ブログに書き込んでいただくか、以下のアドレスまでお寄せください。

e-mail:kazanari@kabulaya.com

鏑谷嘴矢